

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

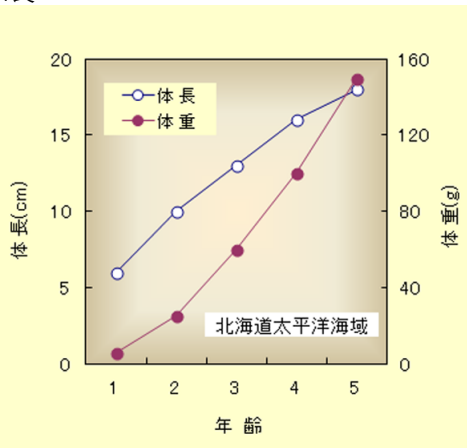
系群名 道東・道南

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明
成熟開始年齢: 3歳
産卵期・産卵場: 春季(3～5月)、産卵場は恵山海丘、襟裳岬沖、釧路沖、落石沖の山状の地形の周辺(水深400～850m)
索餌期・索餌場: 北海道太平洋側沖合の一帯に分布し、主な分布水深は300～900m
食性: クモヒトデ類、ヨコエビ類、オキアミ類、エビ・カニ類、多毛類、魚類など
捕食者: マダラ、アブラガレイ、共食い

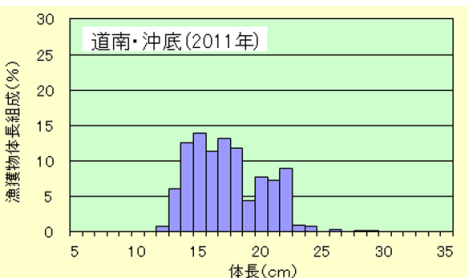
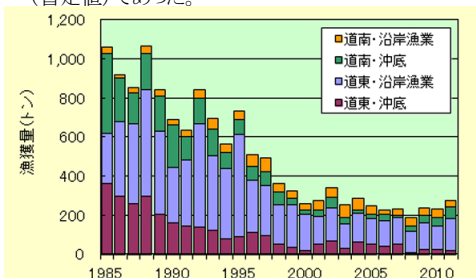


漁業の特徴

沖合底びき網漁業(沖底)の他、えびこぎ網(旧エビ桁網)や刺し網などの沿岸漁業により周年漁獲されている。近年の漁獲量は、沖底よりも沿岸漁業の方が多。また、道南よりも道東で漁獲量が多い。

漁獲の動向

道東と道南における沖底と沿岸漁業の漁獲量は、長期的には減少傾向にある。1985年まで1,000トンを超えていた漁獲量は、1997年に500トンを超え、1999年以降は200～300トン程度にまで減少した。2011年の漁獲量は278トン(暫定値)であった。



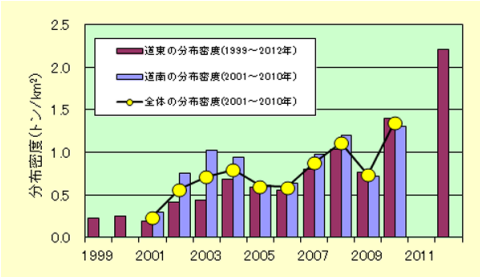
資源評価法

漁船は必ずしもキチジ狙いの操業をしているわけではなく、漁獲努力量が把握できないことから、漁業データとしては、漁獲量の経年変化と漁獲物の体長組成を評価に用いた。また、漁船漁獲物から採集した標本と銘柄別水揚げ記録を用いて、漁獲物の体長組成を推定した。さらに、1999年以降は底魚類を対象としたトロール調査により、調査海域におけるキチジの分布密度を推定しており、これを近年の資源量の指標値として利用した。

資源状態

1985年まで1,000トンを超えていた漁獲量は、1999年以降200～300トン程度にまで減少した。各海域の漁業種類別の漁獲データがそろった1986年以降の過去26年間(1986～2011年)の漁獲量から、現在の資源水準は低位(最高値～0を3等分して判断)と判断した。また、道東海域における分布密度は、1999年以降全体として増加傾向を示した。全体の分布密度も、2001年から増加傾向にあった。分布密度は2001～2004年には、道東海域よりも道南海域の方が多かったが、2005年以降は両海域で同程度となった。2008年以降5年間の道東海域における分布密度の変化から、資源動向は増加傾向と判断した。





管理方策

資源回復のためには、漁獲圧を下げる必要がある。平成24年度ABC算定のための基本規則2-1)に従いABCを算定する。資源動向は増加傾向だが、現在の資源が極めて低い水準であることに変わりはない。未成魚が成熟するまで獲り残し再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	176トン	$0.6 \cdot \text{Cave4-yr} \cdot 1.247$	—	—
ABCTarget	141トン	$0.8 \cdot 0.6 \cdot \text{Cave4-yr} \cdot 1.247$	—	—

- 年は暦年(1～12月)
- 平成24年度ABC算定規則が改正され、ABCは $\text{ABClimit} = \delta_1 \cdot \text{Ct} \cdot \gamma_1$ 、 $\text{ABCTarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、 k は係数(標準値の1.0)、 b と l は資源量指標値の傾きと平均値(直近5年間)である

資源評価のまとめ

- 現在の資源状態は極めて低い水準にある
- 近年、資源動向は増加である
- 豊度の高い年級群が確認できる

管理方策のまとめ

- 漁獲努力量の削減が必要
- 未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される
- キチジの餌生物が生息可能な海底環境の保全・復元を図ることが、資源回復にとって不可欠

執筆者: 濱津友紀

資源評価は毎年更新されます。